

＝繰り返すまい

進め

るよう切望するものであります。
 横芝町は、世界の恒久平和実現のため、町民の平和を願う心を結集し、ここに非核平和の町を宣言します。
 昭和62年12月25日
 横芝町

より平和な地域社会を求めて



伊藤 はる
 (嵯山)

毎年8月になると、広島・長崎の平和祈念行事が、テレビ・新聞などで報道されます。
 町の広報にも「繰り返すまい広島・長崎の惨禍・非核平和はみんなの願い」とくり返し掲載され、横芝町役場の門を入ると、「非核平和宣言の町」と大きな掲示が目に入ります。

あれは昭和62年12月、町議会で——町民の平和を願う心を結集し——と採択され、掲示されたものです。
 ちょうど私は、数人の友と傍聴していましたので、「賛成」と全員起立された頼もしい後姿は、今でもはつきりと思い出せます。
 44年前、母校が爆弾で飛ばされた時、私たちは同時に8名の級友を亡くしました。
 その時には、私たちも近くにちに死ぬんだから——と話合っていました。18歳で将来の希望も生命の尊ささえ考えられないかと思えます。

あたりは暗くなり、市内には余熱と、まだおさまらぬ火災のために入れず、やむなく空き地で野営、翌朝三時頃市内に向けて再出発、数時間後県庁所在地に着きましたが、あたり一面はすっかり破壊されつくしていました。
 やがて担架が渡され、負傷者の救護にあたることになりましたが、不思議なことに、中心部には負傷者も死体もありません。
 後日になってわかったことですが、爆風と熱で、人々は一瞬のうちに吹き飛ばされ、あとかたなく消え失せてしま

世界平和のため核兵器の廃絶を

三日目の午後、休みを許され、友人と市内視察に出ましたが、橋の上から川を見下ろすと、吹き飛ばされた家屋の材木の間に、熱さのため入水したのか、数えきれぬほどの死体が浮いていました。
 市街地にも、まだ収容の行われていない死体がたくさん放置されていました。日数が経っているのに、まともに見られない状態で、異臭が鼻をつきました。
 爆心地を少し離れると、性別のわからない死体が、いたるところにごろごろころがり瓦礫にはさまれていました。
 やがて、大きな工場に到着し、足を踏み入れた途端、息をのみ立ちつくしてしまいました。作業中にやられたであろう焼けただれた死体で、足の踏み場もないのです。
 鮮紅色に焼けた肌は、まるで地獄絵巻を見る様でした。
 市街地には、やけどをした大勢の市民が歩けずうずくまり、行く先もなく茫然とたたずんでいました。
 数十年後、旅の途中で、新幹線の中から見えた広島市の復興ぶりは、とても嬉しく感じました。
 しかし、あの日あの時の生々しい情景は、悲しい思い出として、生涯私の脳裏から離れることはありません。
 世界平和のため、米ソ軍備超大国は、核兵器だけでも速やかに廃絶し、人類の平和に寄与することを、強く望みます。